

# 夫婦の親密性に関する計量分析

東京工業大学 毛塚和宏

## 1 目的

本報告ではダイアドデータを用いて、夫婦の相互行為から親密性を捉えることを試みる。A. Giddens を嚆矢として「親密性」という概念が注目をされている。日本における親密性の議論は、当初 Giddens の議論にあった性的な関係に関する議論が抜け、家族における共同性と結び付けられることが多い。

しかし、この家族の親密性に対する社会調査データを用いたアプローチは多くはない。これは親密性の概念に操作的定義を与えづらいこと、個人ではなく家族・夫婦を捉えるデータが少ないことに起因すると考えられる。親密性は理論的に重要な概念であるにもかかわらず、どのように実証研究で扱うか、大きな課題がある。

## 2 方法

本報告では上記の2つの課題を克服するために、次の方針をもって夫婦の親密性について探索的に分析を行う。まず親密性について筒井淳也の定義「相互行為の蓄積を通じて、お互いがお互いの情報を知り合っているような関係」（筒井 2013: 572-573）を援用する。相互行為を軸にすることで親密性の操作化がたやすくなる。次に、夫婦と子どもに質問紙調査を行った「現代核家族調査」（家計経済研究所）を用いて分析する。夫婦のダイアドデータによって、夫婦双方からの分析が可能になる。

これらの操作的定義・データを用いて、朝食・夕食・会話頻度など相互行為に関連した変数を指標とした潜在クラス分析を行い、親密性のパターンを抽出する。その抽出された親密性が、筒井が指摘するようにメンタルサポートとして機能するか確認する。また、1999年調査と2008年調査の比較を行う。

## 3 結果

2008年のデータを分析した結果は以下の通りである。1) A.朝食を毎日一緒に食べる層、B.夕食を毎日一緒に食べる層、C.どちらも一緒に食べない層の3つのパターンが析出した。2) Aは同居子がおらず共働きの家庭が多く、Cは同居子がいる、夫が四大卒で労働時間の長い家庭が多い。3) A, B, Cの順でメンタルサポートが機能している。

## 4 結論

本報告の分析は、親密性のあり方によってメンタルサポートとしての機能が異なることを示唆している。また、データに限界はあるものの、相互行為に基づいて夫婦の親密性を捉えたことは新しい点であり、このような手続きは今後の親密性に関する実証研究・理論研究のたたき台になりうる。

## 文献

筒井淳也, 2013, 「親密性と夫婦関係のゆくえ」『社会学評論』 64(4):572-588.

## [謝辞]

本報告の分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「現代核家族調査, 1999・2008」（公益財団法人 家計経済研究所）の個票データの提供を受けました。本報告の成果は、東京大学社会科学研究所社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点事業二次分析研究会 2017 参加者公募型研究『夫婦データを用いた、家計、就業、子育てに関する二次分析』を大幅に加筆・修正したものである。